浴衣の君

えんぴつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浴衣の君

【Ｎコード】

Ｎ３０１４Ｃ

【作者名】

えんぴつ

【あらすじ】

ぼくは、毎晩ずーっと「浴衣の君」に悩まされつづけている。それははるか２５年も前の青春のほろ苦い思い出……。

「今日、お義母さんから電話があって、お盆今年はどうするのって」

「ああ、もう4、5年帰ってないからなあ。今年あたりみんなで行くか」

それが期待していた回答ではなかったようで、妻の眼が一気に鋭くなった。

要するに、妻は行きたくないのだ。

ぼくの故郷は確かになにもない田舎町で、そこで育ったぼくでさえ3日もいれば飽きる。

都会育ちの妻にとっては牢獄に閉じ込められたも同然で、そこで田舎っぽさ丸出しのぼくの両親や親戚に気を遣って寝泊りするなど考えるまでもなく嫌なのだ。

これまで何度も盆と正月の帰省の件でケンカを繰り返して来たから、もうやりあうまでもないことだった。

でも、ぼくはちょっと妻の態度にカチンときた。

そして、少しだけ我を通したくなった。

「両親に孫を見せてあげたいし。金ならなんとかするから」

軽く感情的になったぼくは、深く考えずにそう言ってみた。

すると妻は、ぼくの１０倍感情的になって、いろんなことを言い出した。

で、結局ぼくひとりで帰省することになった。

その晩、布団に入ったぼくはいつもより長く浴衣の君のことを考え、股間を膨らませたまま寝た。

ぼくより孫の顔が見たかった両親は、ぼくがひとりで帰ることに、夫婦仲を心配したようだけど、それでも喜んでくれて、ぼくが帰ると精一杯のごちそうでもてなしてくれた。

なあに、夫婦仲は大丈夫だよ、低いところで安定しているから。

って言いたかったけど、両親に心配をかけたくないから、すっごく仲がいいことにしておいた。

久しぶりに来たぼくに、両親やぼくの兄弟は酒を注ぎながら次々と質問を繰り出し、ぼくもこんな待遇を受けたことがないので、上機嫌で質問に答える形でしゃべりまくった。

そんな楽しい時間が数時間過ぎた頃、お袋が「そうそう、クラス会の通知が来てたよ。まあ、毎年来るんだけど。東京にいるお前に言っても仕方ないからイチイチ言わなかったけどね」と言いながら、往復ハガキをぼくに手渡した。

見ると、高校3年の時のクラス会だった。

日時は明後日。

その翌日の飛行機でぼくは帰る予定だから、出席できる。

ぼくは懐かしい顔を思い出しながら、すぐにハガキに書いてあった連絡先に電話し、昔話で盛り上がった後で出席することを告げた。

正直、3日いれば飽きると思っていたから、1つ用事が入ってラッキーだった。

その夜、寝床に入って目を瞑ると、実家にいるせいかよりリアルな浴衣の君が現れ、ぼくは漲るほどの股間の膨張に悩まされた――。

浴衣の君とは、ぼくの初恋の相手、小田優美子だ。

高校の入学式で一目惚れして以来、3年間ずっと思いつづけた女性で、美人で成績優秀、スポーツ万能という全校生徒のあこがれの的だった。

もちろん、平凡な生徒だったぼくなんか、みんなと同じようにただ思いつづけるだけで高3で同じクラスになってもまともに話したこともなかった。

それが、高3の夏休み、ぼくが受験勉強もせずに例によって喫茶店でタバコをくわえながら漫画を読んでいると、その小田優美子がやって来たんだ。

「あれ、いーけないんだ。高校生がタバコなんか吸っちゃ」

その声に慌てて顔をあげると、彼女がいた。

とにかく眩しくって、ぼくが赤面しながら無言でいると、彼女はぼくの横に座り、いたずらっぽく「ちょっとちょうだい」と言って、テーブルの上に置いてあったタバコの箱から1本抜くと、その可愛らしい唇にくわえて、火を着けた。

そして、もうなにがなんだか分からないぼくに、彼女は「明日、盆踊りに行かない？」と誘ってきた。

余計になにがなんだか分からなくなったぼくは、「じゃあ、明日ね」と言って店を出て行く彼女に「じゃ、じゃあ」と返事するのがやっとだった。

それからぼくの心臓はバクバク状態。

漫画どころじゃない。

いろんな「なんで？」が頭をぐるぐるしたけど、そんなことどうでもいい。

とにかく人生初デートだ。

しかも相手は全校生徒があこがれる小田優美子。

もううれしいを通り越して怖かった。

ぼくは一睡もできずに約束の時間に約束の場所に行った。

そこに立っていたのは、カラフルな大きめの花模様の浴衣を着た彼女だった。

制服姿も眩しいが、これはもう反則だ。

実際、ぼくはそれからどこをどう歩いて、なにを話したかはっきりとは覚えていない。

全部、彼女が緊張しまくりのぼくをリードしつつ、確かヨーヨーを釣って、綿菓子を食べたかなあ。

ぼくができたことは、無邪気に笑う彼女の顔を何度かチラッと見たことぐらいだった。

これだけでも夢心地なのに、辺りが暗くなると、さらに彼女はぼくに爆弾発言をした。

「ね、ウチに来ない？　今日、だれもいないの」

その言葉の意味が、このときのぼくに分かるはずもない。

ただ、彼女に誘われればすべてイエスだ。

たぶん、「一緒に死んで」と言われてもイエスだったろう。

ぼくは彼女に誘われるままに彼女の家に入り、彼女の部屋で2人きりとなった。

夢心地のその上は吐き気がするほど居心地が悪いものだった。

そこでぼくはファーストキスをした。

スベスベしていて柔らかい唇だった。

彼女の方から舌もからめてきた。

ぼくは浴衣の上から胸も触り、3年間想像しまくってきた彼女の全裸も見た。

それはそれは見事な裸だったはずだ。

そう、あまりにも神々しすぎてぼくは肝心のところをまったく覚えていないのだ。

でも、確かに見た。そして触った。

柔らかいのにしっかりとした胸も、なにがどうなっているのかさっぱり分からない股間の割れ目も。

部屋は明るいままだった。

彼女は全裸でベッドに横たわり、ぼくは震えながらも夢中でその上に覆い被さった。

だけど、最後まではできなかった。

ぼくがまったく勃起しなかったから……。

彼女が父親の転勤で引っ越したのを知ったのは2学期に入ってか

らだった。

あれから２５年、ぼくは４３歳になったいまでもずっと浴衣の君との甘美で残酷なこの思い出に縛られつづけている。

毎晩、寝床に入ると必ずぼくの頭の中に彼女が現れ、浴衣を脱いで裸になるのだ。

ぼくは股間を熱くするが、残念ながらその先がない。

そしてぼくは後悔の念に苛まれ、身もだえすることになる。

「あの時、できてさえいれば」と。

クラス会には、懐かしい顔が勢ぞろいしていた。

毎年、決まったメンバーで行われていたから、初めて出席したぼくは珍しがられ、ひとりひとりと乾杯し、近況を報告したり、昔の思い出話に笑いあって大いに盛り上がった。

「三沢くん、久しぶり！」

さっきからどうしてもだれだか思い出せない女性がぼくの前に座り、あいさつをしてきた。

「あれ、忘れちゃったの、私のこと」

すると、

「優美子、脱いであげれば。思い出すかもよ～」

「縮んだままだったんだってなあ～」

と、あちこちから信じられない言葉が飛び交い、みんな大爆笑となった。

へ？　まさか？

いまぼくの前に座っているビヤ樽のようなおばさんが、あの浴衣の君？

まさかぁ――。

なんでここに？

彼女はいろいろあって１０年前に父親の故郷であるこの街に戻り、小さな飲み屋を開いていた。

ぼくとのことも酔ってだれかにしゃべり、いまでは仲間内に知れ渡っていたのだった。

「２５年ぶりにリベンジしろ、三沢～」

外野の囃す声にまんざらでもなさそうな酒太りした小田優美子の顔を直視しながら、ぼくは昔の面影を必死で探した。

しかし２５年の歳月はそれを見事に跳ね返してきた。

これでやっと長い間、身もだえさせられてきた浴衣の君から解放される――。

ぼくとしてはかなり複雑な心境だけど、それだけは確実だと思った。

そしてぼくは、なぜか急に妻の顔を思い出していた。

それも失礼な話なんだけど……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3014c/

浴衣の君

2010年10月17日03時58分発行